猫蓑通信

第95号
平成26年
（2014年）
4月15日発行
（年4回発行）

連句協会の法人化

青木秀樹

平成二十六年三月九日の連句協会定例総会に於いて、任意団体であった連句協会を解散し新しく設立した一般社団法人日本連句協会にそっくり移管することが決定した。連句懇話会時代から三十年越しの念願がかなったということになる。旧連句協会の目的である「連句文芸の興隆」という方向はそのまま継承されるが、法人化したから協会の活動がすぐに大きく変わることはない。連句の普及・発展のための活動を活性化する素地が整ったということである。これからどのような活動を推進するかが協会の命運をわけることになると思われる。

連句協会の役員を十年余務めている立場からの反省を含めて、協会の現状を整理してみたい。

連句協会は「カネもない、ヒトもない」団体である。連句協会停滞期といわれるこの十年余、様々な活動が内向きで、現状維持的であったことで活力が失われた結果ともいえる。

協会の抱える問題点はいろいろあるが、まず連句人口が少なく、地域的な偏りがあることがあげられる。連句界にとって大きな行事である国民文化祭はこのところ連句過疎県での開催が続き、連句文芸は協賛参加に終わっている。

次に、連句がまだあまり知られていない文芸であること。協会会員は九百名、連句人口は多めにみても一万人まで行っていない。連句を対外的にアピールするための方法、連句に興味のある人々をいかに惹きつけるかなど、時間をかけて検討し、実行することが重要になる。

三番目には、すでに連句をしている人に対して連句協会会員になるメリットをどう伝えるかの問題である。協会会員になるメリットが本当にあるのかどうかから考えなければならない課題である。連句グループは全国で約二百五十程度、その大部分が会員十名以下の小グループ。グループ内で連句の座を楽しむ「同好会」的な存在である。メンバーが高齢化し活動停止になるグループもある。協会会員数が減少する傾向にあることもその現れである。協会の構造改革が必要なことがいま論じられている。

戦後の連句文芸復興に力を尽した先人達が単なる娯楽としての連句復興ではなく、本格的な文芸としての連句復興をめざされたことを思うと、協会の現状は寂しい限りである。

幸い私たち猫蓑会会員には東明雅先生の教えをベースとして、連句を楽しみながら、現代人としての感性による文芸作品を創作する習慣が身についている。「付けと転じ」に最大の努力をし、「連衆心」を大切にすることが普段の座でもできているものと思う。猫蓑会の中での活動だけでも連句を楽しむことはできるが、全国各地の優れた連句人と交流することによってよい刺激を受けることができる。猫蓑会のみなさまの力量をもって協会活動に参加すれば、日本連句協会のレベルアップにつながると思われる。日本連句協会の活性化を促すためにも協会に参加することを会員諸氏にお願いしたい。

●目次●

第百二十八回猫蓑例会・初懐紙作品　歌仙十巻　2
甘汁苦汁　芭蕉の心法その一――根津芦丈　7
その二――同　8
温故知新12：片隅の貧しい命　10
事務局だより　12

第百二十八回例会初懐紙興行 一～四

一・謡初の座

歌仙「初富士」　上月淳子　捌

群山を従へ初富士屹立す　淳子
　淑気漂ふ一片の雲　雅子
床の間をすがしき軸に掛けかへて　碧
　漆の椀に盛りし煮びたし　ふみ
月今宵村に自慢の能舞台　徹心
　友の額に叩く溢れ蚊　雅
ウ　美術展子のお習字を見にゆかん　碧
　白黒はっきりつけるあの人　雅
追ひかけて根室函館小樽へと　み
　焼棒杭がまたいぶり出す　心
溶岩の流れは止まず島続き　雅
　水着を買はう値上りの前　碧
アルバムを繰れば射し込む月涼し　み
　昔語りよ東洋の魔女　雅
部活仲間ときどき集ふ飲み会に　碧
　新発意の掃く境内の道　み
空青き豊葦原の花吹雪　碧
　春告鳥の鳴き交はす里　心
ナオ　凧合戦若者衆が熱を帯び　雅
　コンビニで買ふのりの弁当　み
振り込め詐欺己が身にとは思はずに　心
　目も耳もなく海鼠ひっそり　雅
自動ドア枯葉とともに通る人　碧
婚活パーティー母親が行く　雅
ねらふのは肉食系の王子様　心
　遺伝のせいで何も決まらず　碧
干拓の海はだんだん遠くなり　み
　緑の中を三陸鉄道　心
今年絹月の窓辺に織り上げて　雅
　全集物をひらくやや寒　碧
ナウ　秋爽の故郷の家父在す　み
　ミケにブチぬて黒猫がボス　同
碁に負けてくやみながらに帰る路地　心
　だましだましに頭痛腰痛　雅
花の中祝詞朗々響ききて　淳
　大皿に載る鯛の濱焼　心

連衆　武井雅子　松本　碧　中村ふみ
　佐藤徹心

二・舞初の座

歌仙「すこやかに」　本屋良子　捌

すこやかに猫の集へる初懐紙　良子
　少しほころぶ紅白の梅　了斎
霜くすべ段々畑にけふも来て　冬乃
　じやんけんぽんと児等の歓声　美代子
薄雲の月へ流れてゆくごとし　則子
　まるめろの香の部屋に溢るる　乃
ウ　新体詩読めばかの秋甦へり　斎
　忘れかねたる文の一行　乃
盃かさね酔うた勢ひで告白す　則
家族とは何問ひかける人　代
葉脈も茎もむらさき茄子の花　斎
　流し素麺樋照らす月　乃
大都会シェアーハウスがトレンディー　代
　掃除当番ベテランの域　乃
座禅して心の塵を捨てにけり　代
　四方の山に響く鐘の音　則
光降る中を花舞ふひもすがら　斎
　閑居の屋根に鳥交りぬる　則
ナオ　じいちやんが遠足といふ撮影会　乃
　三途の川を渉る練習　斎
満州の赤き夕陽よ友の顔　同
　ネイルアートに火の色を見る　代
ネグリジェのサテンのリボン解きつつ　則
　餃子の臭ふ熱き抱擁　代
名女将どこにどうして居るのやら　同
　冬眠長きみちのくの蛇　斎
富士山のマグマが溜まる雪原に　同
　外資を入れて起業成功　乃
月明り夢と現実ないまぜて　代
　万聖節の鬼になる父　乃
ナウ　冷まじや白兎跳び次ぐ北の海　同
　老のシャンソン唄ふ裏街　則
名画座で見た雨降りのスクリーン　斎
　奴と一緒に自転車を漕ぐ　代
革命の議論百出花莚　良
　ブラックコーヒー啜る朧夜　則

連衆　鈴木了斎　百武冬乃　山田美代子
　伊藤則子

三・打初の座

歌仙「平和の国」　倉本路子　捌

静かなる平和の国の初明り　路子
投扇興に挙がる歓声　俊子
決勝のボレーシュートはまつすぐに　常義
レシピの通り作るパイ生地　美奈子
仰ぎ見る月に桂のあるといふ　照子
芒の原を吹き抜ける風　敦子
ウ　駈けくらべ茄子の牛と瓜の馬　奈
はちきれさうな君十五歳　同
ハネムーン1DKは夢のやう　照
古女房は漬物の味　義
遠ざかる列車の尾灯見送りて　同
月も乗せゆくだんじりの肩　奈
お出でやす葵祭へはんなりと　俊
枕の下に響く水音　義
むつかしいトイレのボタン間違へて　敦
年号暗記のことばあれこれ　俊
花びらの傘に重たく降りしきる　同
朝寝楽しむ今日はホリデー　敦
ナオ　粛々と永代橋を義士祭　奈
道路掃除の奉仕活動　照
課長夫人社宅住まひのリーダーに　俊
英会話ならイケメンがよし　義
嫁ぎ先こんなところに同級生　敦

平成二十六年一月十九日
於　ホテルフロラシオン青山

こたつの中の猫が知つてる　奈
アブサンを呷りひと夜の恋が咲く　同
兜を脱ぎし小言幸兵衛　敦
八％そりや聞こえませぬ消費税　奈
泣く子も黙るアンパンマンは　敦
ビル街の真闇を照らす真夜の月　同
山の端越ゆるかりがねの竿　照
ナウ　校庭を均らす生徒ら爽やかに　義
オルガンを弾く村の教会　照
被災地で第九指導の名指揮者　俊
ひづみ妙なり赤楽の碗　照
にじり口出でて仰ぎぬ花大樹　路
雨戸閉ざせば蛙遠のく　敦

連衆　三木俊子　生田目常義　鈴木美奈子
田所照子　武井敦子

四・弾初の座

歌仙「尾張から」　杉山壽子　捌

尾張から江戸へ三十歳初懐紙　壽子
春着の裾をひよいと持ち上げ　恭子
板前の磨ぎし包丁そろへゐて　酔山
特別コースイラストが付き　啓子
山の端を銀にかがりて昇る月　要子
矯めつ眇めつつかむ蟷螂　山
ウ　西鶴忌昔の友はかはり者　恭
傀儡にたくす想ひあれこれ　要
ぼんぼんの悪所通ひも潮時か　啓

札の飛行機飛ばすあの娘に　壽
弁護士の蝶ネクタイは縞の柄　恭
アタッシュケースやつと買ひ替へ　要
夕薄暑月うつすらと高架駅　啓
祭太鼓の遠く近くに　山
代々の仕事は何と問はれても　恭
金釘流の永字八法　要
花の宿ここはピンクのユートピア　恭
ムーミン探す谷に陽炎　啓
ナオ　父もゐて祖母もにつこり磯遊び　山
警察犬の窺くほら穴　恭
練習は嘘はつかぬと励みをり　要
重いメダルを桐箱に入れ　啓
お笑ひのタレントなんだ吉本の　山
打たれて逃げるきぐるみの鬼　啓
生姜湯は愛も憎さも混ぜて飲み　恭
結婚式には来ない親戚　同
肖像画鴨居の上で睥睨す　山
校庭にあるポールぽつんと　要
月に哭くトランペットの大き背　山
秋刀魚の煙払ふ掌　恭
ナウ　列なして限定販売新走　啓
リハビリ当番前で号令　恭
今年また故郷の舞台で地唄舞ふ　山
首につけたる鈴のちりちり　要
吹きあがる花は天まで天までと　壽
かみ風船をふくらます子等　啓

連衆　式田恭子　吉田酔山　小池啓子
山本要子

第百二十八回例会初懐紙興行 五～八

五・点初の座

歌仙「松籟に」　島村暁巳　捌

松籟に師の面影や初懐紙　暁巳
　硯の海に年酒一滴　和代
囀に足取り軽く弾みゐて　央子
　蕗味噌作り味を整へ　英二
春の月黄色く円くクレヨン画　代
　ママゴトの母ママにそっくり　央
ウ 秋祭笠目深くて柳腰　英
　噂広まるやや寒の頃　代
駆落ちは特急ときを予約して　巳
　新人類の旅は爽やか　英
異業種の気鋭の議論月の下　同
　猫クラブには高貴なる猫　央
夏富士を仰ぎ湾ゆく豪華船　代
　木を伐る鋸に白南風の吹く　央
大鍋のブーケガルニを探りゐて　代
　料理女で終る生涯　央
花を追ひ三春の花の同窓会　同
　のどかな日和熱気球飛ぶ　英
ナオ 蜃気楼見つけ指差すピエロ達　代
　国難掲げ元総理立ち　英
治らない貧乏ゆすり如何にせん　央
　隣の老婆灸を勧める　巳
冬ざれて蜘蛛の古巣は破れをり　英
いつ代ったかボスの寒猿　代
深夜バス客の多くは独り旅　英
　彼の好みにはまる嬉しさ　央
人の世の恋に溺るる吸血鬼　代
　窟の教会地下牢を持ち　巳
山の端を発ちて渡れる月の船　英
　笛に合はせて踊る同衆　同
ナウ 鮮やかな太鼓囃子の身に入みて　代
　じいじいじとまとひつく孫　央
新聞は三種くまなく読みつくし　同
　修復進む国宝の門　代
飛花落花和上坐します招提寺　巳
　星屑仰ぐ清明の候　英

連衆　長崎和代　遠藤央子　高瀬英二

六・結初の座

歌仙「魚いづる」　林　鐵男　捌

魚いづる結氷割れる頃合に　鐵男
　人影ひとつ見えぬ冬景　美恵
それぞれに秘めたる大志あるならん　一枝
　食器洗ひはエコの石鹸　ひろみ
名月に供へる団子こども等と　志世子
　きゅっきゅらきゅっとあかがちが鳴る　枝
ウ 龍田姫カラーセンスが超素敵　恵
　服からきめる市民ランナー　み
風呂上り男くささにむせ返る　同
麒麟の刺青うごめくを見せ　恵
思ふ事メビウスの輪を行くごとし　枝
　つい乗り越した電車一駅　世
宵宮は皆神妙に頭垂れ　枝
　ジェラート溶ける短夜の月　恵
ベトナムかあるいは巴里か旅プラン　世
　古都にその名を残す白髯　枝
花の精住みて幾年花大樹　み
　田鼠うづらになりたくはない　恵
ナオ うららけし我が晩節を感謝して　枝
　小学唱歌口ついて出る　世
村はづれ同じ苗字の参り墓　恵
　君なつかしと金釘の文　枝
狙ひきめ奴殺すにはこの笑くぼ　み
　細腰きりり締める仕事着　同
小さめのランチボックスさりげなく　恵
　ストーブの水忘れずに差せ　世
漱石の紫檀の机月さえて　枝
　通販に出た本は格安　世
おもてなし一味違ふプチホテル　恵
　ロゼワイン飲むみんなママ友　み
ナウ 街々の英語表示に手をやいて　世
　有平棒の休むことなし　恵
心経の本義解釈丁寧に　世
　糸目しっかと裁着を縫ひ　み
紅枝垂触れなば色は染むる程　男
　姫虻ふはりゆれる大空　枝

連衆　山口美恵　西田一枝　江津ひろみ
　秋山志世子

七・織初の座

歌仙「初富士」　高塚 霞　捌

初富士や茜に染まるシルエット　霞
　雲なく晴れた空を節東風　文子
いづくより竪琴の音の聞ゆらん　久美
　伝統芸は一子相伝　洋子
公民館月の説話を楽しみに　忠史
　天まで届け藤豆の蔓　同
ウ　草泊けふも歩くか山頭火　洋
　フォーチュンクッキー吉と出てをり　美
権禰宜はブルーの袴よく似合ひ　文
　あなた好みに変へる妖術　同
借財を持って長者と結ばれる　美
　人気の映画既に封切　史
出してくれラムネの玉がカラカラと　洋
　山小屋の外浴びる月光　文
泡立ちの悪い石鹸改良し　洋
　如何してくれる都知事候補は　文
どこに咲く私の花は仮の花　洋
　春炬燵まだそのままにして　同
ナオ　次々と挑む羽ばたき巣立鳥　史
　お血脈にはそっと触れます　同
医学部の闇の深さを見詰めつつ　霞
　大王烏賊の潜む海底　文
お転婆な姫さま攫ふパイレーツ　美
八人目には遂に降参　文
巡る盃酔ひつぶれたり年忘れ　史
　タクシー待てば粉雪の降る　美
ニューヨークユダヤの人の黒い帽　洋
　万国共通猫はわがまま　同
天鵞絨の寝椅子の上を渡る月　美
　孫も並んで灯火親しむ　史
ナウ　邯鄲を聞きつつ溶かす岩絵具　文
　左利きにはねぢは厳しい　史
宝くじ七億円てふ夢のあり　美
　箸だけになる甘き綿菓子　洋
花の下記念撮影にこやかに　霞
　シーソー遊び鐘霞む頃　史

連衆　橘 文子　齋藤久美　大島洋子
　根津忠史

八・縫初の座

歌仙「初釜や」　野口明子　捌

初釜や母の手縫の出し袱紗　明子
　元日草を寄植の鉢　千恵子
春スキー友のシュプールなぞりゐて　豊美
　ウエストポーチ少しゆるめに　久美子
いにしへの人も愛でたる望の月　瞳
　銀杏を炒る音もごちそう　同
ウ　官僚の密談の間のそぞろ寒　千
　富と力で恋を実らせ　同
帰ったら知らない女(ひと)に会釈され　瞳
ゴミ箱いっぱいガチャポンの殻　久
中国製韓国製にベトナム製　同
　祭囃に踊りだす人　瞳
夏の霜踏みつつ祢宜の列長く　千
　地酒上々名水の里　豊
迷ひたるインターネットのお取寄せ　久
　封を切るのが何よりも好き　瞳
姿よき大島桜花見頃　久
　市民ランナーのどらかな声　千
ナオ　蜜蜂も養蜂家にも休みなし　瞳
　右に左にやじろべゑ揺れ　千
銀幕のタイタニックに波しぶく　同
　NG集に笑ひころげる　瞳
冬籠株で生活二十年　豊
　亭主秘蔵の柿右衛門皿　同
誰よりもあなた私の宝物　千
　仮面劇だと知って溺れる　豊
コーヒーは濃いの薄いの作り分け　久
　エコでソケット抜いてばっかり　同
六畳間松の影さす月今宵　豊
　郊外の苑病んだ鹿鳴く　千
ナウ　山粧ふ子のスケッチののびやかに　同
　毎日変はる将来の夢　瞳
目前に東京五輪迫りたる　久
　税金ばかりかけて選挙と　瞳
露座仏へぬかづく肩に花吹雪　明
　大きく高くしゃぼん玉飛べ　豊

連衆　副島久美子　鈴木千恵子　髙橋豊美
　北爪 瞳

平成二十六年一月十九日
於　ホテルフロラシオン青山

第百二十八回例会初懐紙興行 九～十

九・刷初の座

歌仙「手斧始」　松原昭　捌

墨糸のきりりと手斧始かな　昭
　鳥総の松の残る門前　孝子
子どもらはダブルダッチのきりもなし　有子
　十六ビート流すイヤフォン　曜子
船室の窓から覗く望の月　鄭和
　銀鮭の皿運ばれてくる　孝
ウ か細くて耳そばだてる鹿のこゑ　和
　慕ふ男はもしやその筋　孝
おち逢へばタトゥーとタトゥーすり合はせ　和
　家族風呂より見ゆる連山　有
日本食世界遺産に認められ　曜
　閻魔詣の辻に射す月　孝
腹あてがまだ乾かぬとママの愚痴　和
　隣の喧嘩筒抜けとなり　有
消せません修正液は隠すだけ　同
　実は私裁判員です　孝
今日もまた花の大樹に魅せられて　曜
　風に靡かす佐保姫の髪　孝
ナオ 洞窟に亀の看経ひもすがら　有
　小野田少尉の訃報きく朝　孝
島の娘はハイビスカスを耳元に　和
　嫁ぐ衣装に染める紅型　曜
閨事の夢とは違ふおたはむれ　孝
男みがきに売上げは億　曜
縁無しの眼鏡の中に雪が降る　有
　あの足跡は野兎のもの　同
身辺を身ぎれいにして知事選へ　孝
　親の介護で帰る故里　有
月へ向け歌大声で歌ひたり　同
　野分の後に掬ふ新湯葉　孝
ナウ 秋出水感謝感謝の自衛隊　同
　先づでしやばりの悟空参上　和
見得切つて俺等の時代はやしたて　曜
　廻り舞台に照明を入れ　孝
花爛漫矢立初めの千住訪ふ　昭
　自治会館にかかる鳥の巣　有

連衆　坂本孝子　佐々木有子　前田曜子
　高山鄭和

十・読初の座

歌仙「清涼山」　平林香織　捌

年新た若獅子遊ぶ清涼山　香織
　楽屋のれんに揺るる繭玉　佳之子
早番は薄き氷を踏みしめて　弘子
　駅まで共に紅梅の道　太郎
洋館の棟高々と月朧　秀樹
　プリマのレッスンいよよ佳境に　弘
ウ シャネルの香つけたタオルを持ち歩く　樹
　扇のかげで交す目くばせ　佳
逞しい男のくせにうぶな奴　樹
　床上手なり友人の妻　佳
同窓会あらぬ噂のかけめぐり　太
　月の縁にて濁酒酌む　弘
ひとり旅秋の港の理髪店　太
　石に置きある鮭打ちの棒　佳
長丁場記録映画が大賞に　弘
　ｉＰＳで視力再生　樹
角櫓花の雲よりつき出して　佳
　お伊勢参にバスの犇めく　太
ナオ 孫の分引き受けて食むわさび和へ　弘
　末は博士と望む理科系　樹
遠吠えの犬は悲しき過去を持ち　同
　よせばいいのに知事選に立つ　太
これからは籍を入れずに墓も別　佳
　心移りも文化なる国　樹
ジョギングの長き影行く冬の土手　太
　アナウンサーの告げる初雪　弘
張り込みの敏腕刑事足しびれ　佳
　栄養剤買ふ夜の自販機　弘
環状線あんな所にビルの月　太
　樫の実まろび道を教へる　弘
ナウ そぞろ寒宇治拾帖に差しかかり　樹
　オークションにて名品を得し　佳
胴巻の預金通帳がっちりと　弘
　工事現場に獣の骨　樹
きのうけふあしたの風に飛花落花　織
　時の鐘打つのどかなる午後　太

連衆　染谷佳之子　松原弘子　功刀太郎
　青木秀樹

平成二十六年一月十九日
於　ホテルフロラシオン青山

甘汁苦汁（第九回・芭蕉の心法その一）

根津芹丈

昭和四十（一九六五）年七月二十日刊
「山襖」第十号より転載

昭和三七年度の、俳文学会の総会が太宰府の文書館にて開かれた際、冬の日の「狂句凩」の巻中の、時鳥に秋水の一聯が、心法を説くに好適であるから取上げた。此の一聯に就ては正しい註解を下したものは一つもない。何丸の大鏡、曲斎の婆心録、露伴の冬の日抄、此の三者に就いて要点をかいつまんで批判を加えて発表した。二十五分間という短い時間であるから、誤解悪解も何の様のものであるかが明らかに出来なかった。そこで今回は、其の解く所を残らずあげて、それに批判を加え、私の註解を加える事にいたします。

○何丸の七部集大鏡

狂句凩の巻ナオ七句め

白々と砕けしは人の骨か何　杜國
　烏賊はゑびすの国のうらかた　重五
あはれさの謎にもとけし郭公　野水

一書に、骨か何と云うをうけて、いやいや骨にあらず烏賊の甲なり、亀の甲は卜筮に用いて吉凶をこころむ、烏賊の甲は胡国のうらかたによきなりと取上げて占う云々。一書に、前句の人の骨か何と云う句を幾度も吟じかえして見、晒骨累々として古戦場也、と見ての作なり。其の烏賊の甲ならば胡国の占となさばやと云々。一書に、謎は占ひの対附なるべし。前句のむずかしきを謎ととりなして、日待か庚申待などのたわむれ遊びとして附けたり云々。

愚【考するに】此の三句のはこびは流罪の人の俤なり。抑亀卜の来由と云うは、史記の亀策伝に曰く、自古聖王(以下漢文の分三行を略す：原注）又西陽雑俎に曰く、昔秦王当方に遊びて筭の袋を海に落す化して魚となる、故に其の形筭の袋の如し。又南越志に云う、此の魚を烏賊と号るは、其の性烏を好むいつも水上に浮いて待つ、烏これを見て死にたりとして是を啄むを、巻て水中に沈んで是を喰う故にうぞくと書くと云々。彼の流罪の人しらぬ浜辺に出て逍遙すれば何やらちさき白きものあり、こは人の骨か何と心ぼそくもとりあげ見れば骨にはあらでいかの甲なり。幸い我身の落着を占わん、浜辺のことなれば草木は勿論金石とても見えず、嗚呼昔秦王の筭袋化してなりたる魚なれば胡国のうらかたには究意の事なりと占をなす。所にあわれさは時鳥の一声告げる、謎にて我も此の地にて骨になるならむかと驚きたる眼前見るが如し。されば烏賊の甲も手づくりの杜撰にはあらで深き拠り所あり。又西陽雑俎曰く、杜鵑初めて鳴く、聞く者遇別離悲、又華陽風俗記曰く、杜鵑春至則鳴先聞者別離苦、皆かく深きより所ある事をあだに見るべからず。

丈曰く。「冬枯わけてひとり唐苣」と云う句に、晒骨累々として古戦場なりと、こんな見方は間違いの甚しいものである。又、附句のむずかしい時には、謎ととりて日待か庚申待などの戯れなりと云うに至りては、唯笑っておく価値もないが、現在でも前句を夢にとり芝居にとりなす人があるが、蕉風の埒外のものである事を警告しておく。又、何丸の註解を約めて云えば、此の三句の運びは流罪の人の俤なりときめて、亀卜の来由を長々と述べ立て、あわれさは時鳥の一声を告げる謎にて、我も此の地にて骨にならんかと驚きたる、眼前見るが如しと結んで居る。

白々と砕けしの句は杜國の自の句である。浜辺の小さい砂畑に苣の青々としたるを詠めて、白々と砕けて居るのは何だろう、と云う句である。その句をうけて重五が、烏賊の甲であればえびすの国では占いに使うときくがと受けた二句一意とも云える重五の自の句である。何も面倒はない句である。自分と一枚になる、之が蕉風であり心法である。流罪の人の俤であるなんどと蕉風も心法も全然知らぬ者の寝言である。

時鳥の附句は少々難物である。占かたに対する対句であるととく人もあるが、附筋から云えばそう簡単に片つけてはおけぬ。何とあり、占かたとある気趣から来た附句であるが、はっきりした説明は出来がたい附けである。

秋水一斗もりつくす夜ぞ

一書に、曲節の手本なり、謎と云う字を咎めて秋の夜の長きさまを附たり、水一斗に漏刻をもたせたるものなり。一書に、秋水は酒なりアキミヅと云わずシウスイとよむべし。秋は酉のかたにて金気あり酉なれば散水にひよみの酉を

書いて酒の字の義も是によるとなり、一斗もりつくすは酒宴なりと云々。愚考、秋水を酒と見るは非なり、一巻のうちに酒の沙汰二ヶ所に及ばんや。先註の如く漏刻に定めり。事林広記に漏刻制度黄帝漏水制器以分昼夜、本朝にては天智帝いまだ太子の時はじめて漏刻を置給ひて時刻の鉦鼓をうたしむ。

丈曰く、何丸は時鳥に秋水に就ては何も云って居らぬ。こんな馬鹿げた、横道へばかり這入って居る、愚解を長々と書いて、正しい註解は一つもないと云った事の裏書きに煩しくも書きつらねました。次号には曲斎の婆心録に就て書きます。

甘汁苦汁（第十回・芭蕉の心法その二）

根津芦丈

昭和四十（一九六五）年九月二十日刊「山襖」第十一号より転載

○曲斎編婆心録

此の婆心録は、符号をつけ、箇条書きにして厖大のものである。之をいちいちとり上げて居たらややこしくて、誰も読んではくれぬ。その尤もあしき処だけをとりあげることにします。

自註大概のうち、

○起情とは前句の一字一言も洩さず、意を転ずる案じ方也。

○哥仙に起情二十句あるをよしと逃句三句以上交えたるをあししとせり。

とある。曲斎は起情と云うことを全然知らぬから、こんな馬鹿げたことを云うのである。起情とは読んで字の通り情を起すのである。叙事、叙景等人情なき句へ叙情（人情：原注）の句を附ける、之を起情と云うのである。

又、起情二十句あるをよしとすと、哥仙一巻中へ起情の句を二十句など、蕉風の連句の運びも自他の句の移り変りも全然知らぬ者の囈語である。

秋水一斗もりつくす夜ぞ（叙事）　芭蕉
日東の李白が坊に月を見て（叙情）　重五

又

冬の日のてかてかとして掻き曇り（叙事）　越人
玄猪に行くと羽織うち着て（叙情）　野水

この様に人情なき句へ人情の句を附ける、これが起情である。

○見立方、見立て方の法は延宝の昔より今も猶同じことなり。一註のうちに△印あるは、見立趣向句作の定法の再弁也。都て定法と云うは千萬返にても違わぬことなり。

右は婆心録の前文中より二ツだけ取上げて見た。延宝の昔よりと云うのは、何をさして云うのか、貞徳が勅命をうけて作った、御傘が慶安四年で、その以後数え切れぬ程出て居る作法書は、大部分が貞門の徒である。それらのガンジがらめを蹴破って、自由の天地を開いたのが蕉風である。然し自由と云っても野放しではない。守るべき制約もあり心法がある。

○狂句凩の巻　ナオ六句め

冬枯わけてひとり唐苣（叙景）　野水
△前句笠脱いでと云うを、傘も着ず時雨に濡れて蹲み居ると云う詞と見立て其人の用を付けたり。

曲斎は、体用の別も知らぬ。体は其人、用は其人の言葉、衣服、動作等。山が体で木が用、天が体で雲が用等である。この唐苣の句は、其場である。

次の「人が何」の句も、占形の句も、大鏡の註解の蒸し返しになるから、とばして次の句へ移る。

○哀れさの詩にも作りし時鳥　野水

この句の註も大鏡の註の蒸し返しになる部分はとばす。猶この原句は「哀れさの謎にもとけし時鳥」である。

○再版謎にも解けしとあるは、原書詩の字の作の字磨滅し詩とも謎とも分からざるを、打こしに李白あれば詩にはあらず、謎ならんとさかしらに思い定め、作も解の磨滅と朧に訓下して、剰えとけしなどと辞迄違えけり。抑も占形に謎と付ては註になる上に、謎にては一句も済まず、後句天眼天耳にも聞えぬ句となるにや。

原句を改作して註解するなど、洵に驚入った馬鹿者である。貞享甲子歳京の井筒屋床兵衛板で出版して、随分売れたものである。芭蕉はじめ皆健在で居る時に、磨滅して云々なぞ絶対通用するものではない。蕉風打壊しの悪書であるにも拘わらず、蕉風と云うものを知らぬ教養高い人々に読まれて居る。曾て勝峰晋風氏など曲斎はよいものを遺してくれたと私に云った事がある。であるから氏は蕉風の連句は出来ず終いであった。この謎の改作を頂点として全篇よい処は一ヶ所もない悪書である。

○秋水一斗もりつくす夜ぞ　芭蕉

△前句にもの余韻哀れさの哥にもよみし時鳥と時鳥に呼びかける詞と見立て其次の詞を付たり。秋水一斗漏りつくす夜ぞとは水時圭漏り果る暁迄も時鳥待ても鳴かぬ故、そちは哀れなる哥にもよみ、哀れなる詩にも作る鳥なれば、人の哀れを知りせめて一声なけと、長き夜を待ちわび恨み云う様なり。

△夏の夜を付くべきを長く待ちし体をきかせんと云々。

○諸註謎の字に迷い此二句甚だ苦みたり。

時鳥は、季題では夏季に分類してあるが、時鳥は人間の作った季題が何であろうと、鳴きたい時にはいつでも鳴く。春の終り頃から鳴きはじめ夏中鳴いて秋になっても鳴く。私は八月の五日にもきき十五日にも聞いて居る。山の伐採事業をする人と落合った際の話、彼岸迄は鳴く彼岸すぎには鳴かぬとの事だ。前句の時鳥の句柄から見て、普通の時鳥と見る様な芭蕉ではない、秋の時鳥とにらんでの附句である。あり得るものは附く、あり得ぬものはつかぬ、之が蕉風であり心法である。

芦丈私の註解は、芭蕉がある山家の寺か、さる家に泊って談たまたま時鳥のことに及ぶ、今頃時鳥が鳴きますか、エー鳴きます、炉端で茶でも呑みながら待つことにした、夜もだんだん更けて来た、折から裂帛の一声また一声之は驚いた、秋も半ば過ぎたる今頃、謎の如く疑問に思って居たるに驚いたと云って居ると、東天が白々と白らみ六ッ時を知らせる漏壺の水の漏りつくすにて、何も面倒も無理もない。遉に芭蕉の附句である。

芭蕉は句と自分と一枚になれと云い、造化に随い造化にかえれと云う事も、句と自分と離れて浮き上った句を作るなと云うことである。実物に身を持ってぶつかる事である。俳句でも附句でも、浮き上ったものは蕉風ではない。心法も外れたものである。

萬葉の哥人は正直である。

○時鳥声きく小野の秋風に
　萩咲きぬれや声のとほしき　小治田広瀬王

秋時鳥が鳴けばそれを偽らずに詠んで居る。だからいつまで経っても万葉集は尊い。

「芭蕉の心法その二、その三」解題●前号（第九十四号）に『山襖』第十二号の「甘汁苦汁第十一回・芭蕉の心法その三」を転載した。今号では、それに先立つ「その一」「その二」を転載した。

転載順序を逆にした理由は前号に記した通りだが、「その一」「その二」も重要な記述を含み、味読に値する。

「その二」で芦丈師による批判の俎上に乗せられている小沢何丸は、宝暦十一（一七六一）年に生まれ、天保八（一八三七）年に没した信濃（長野県）出身の俳諧師。本姓は茂呂で、茂呂何丸とも呼ばれる。俳諧を高桑闌更に師事した。五十歳台から蔵前の札差守村抱儀の援助をうけ芭蕉研究の著述に専念。著書『七部集大鏡』『芭蕉翁句解参考』など。

「その三」で取り上げられた原田曲斎は、文化十四（一八一七）年に生まれ、明治七（一八七四）年に没した、周防（山口県）出身の俳諧師。獅子門（美濃派）で俳諧を学んだが、蕉風復古をとなえて破門され、自ら「七草吟社」を創始して芭蕉研究に努めた。著書『貞享式海印録』『七部婆心録』など。

何丸はともかく、原田曲斎の業績に対する幻想は現代連句界にも残っているように思われるが、蕉風を復活しようとした意図はともかく、ここに引用されたごく一部からも、その中身の実際は錯誤と牽強付会に満ちた支離滅裂なものだということが十分に推察できる。

何丸と曲斎に共通するのは、実感の裏付けのない理屈のための理屈だ。そこには現実の人の生活や、命あるものの営みに、自身の心からの共感と実感をもって寄り添う「俳諧の誠」が感じられない。肝心な蕉風の魂が抜けている。芦丈師が「あり得るものは附く、あり得ぬものはつかぬ」「句と自分と一枚

になれ」などの表現で繰り返し強調しているのもそのことだし、「芭蕉の心法」も詰まるところはそのことに他ならない。

ここで芦丈師が時鳥について書いたのと同じようなことを、東明雅先生が燕について語られるのを筆者は聞いたことがある。

朝日カルチャーセンターの連句入門講座の実作で、花（晩春）の句に続く挙句に燕（仲春）の句が治定されたことについて、晩春の次に仲春の句を付けるのは季戻りで式目違反ではないか、という質問が生徒から出た。明雅先生の答えは「燕は仲春に渡ってくるから仲春の季語になっているが、そこで消えてしまうわけではなく、夏燕から秋の帰燕になるまでずっといる。当然、桜の花が咲いている時も燕はさかんに飛んでいるから、花の句に燕の句を付けてもまったく自然であって、季節感が逆行するわけではない」という趣旨のものだった。季戻りというのは、歳時記の分類項目に照らして逆行するかどうかではなく、身の回りの自然の現実に照らして不自然な順序の句の並びになっていないかどうか、が問題なのだ。私たちの師である東明雅先生は、確かに芦丈師の弟子としてその教えを引き継いでおられたと、このようなことからもわかる。

逆に、たとえば初秋の句に晩秋の句をつけることで、実際の季節感としてどう見ても前後の句の関係がかけ離れて不自然になるときでも、形式上「季戻り」ではないから見過ごされている、というような例は、現在の私たちの身の回りに沢山ありはしないか。また前句との自然な関連性をまったく感じられない異季の句を付けて平然と「季移り」だと開き直る無神経が横行してはいないか。明雅先生が亡くなられて長くなるにしたがって、私たち自身の「俳諧の誠」に緩みが生じてはいないだろうか。

問題は季感のことだけではない。共感のない、揶揄するだけのような恋句、興味本位のポルノまがいの恋句、またマスコミの空騒ぎに便乗し、新聞の見出しを引き写しただけのような、思索の深みも実感の裏付けもない「時事句」、そうしたものを明雅先生は強く嫌っておられた。他流をあげつらう前に、今、そうしたものがひそかに、あるいは公然と、身の回りに蔓延していはしないだろうかということを、私たち自身が真摯に省みる必要がある。

明雅先生は私たちの作品について「この句のどこに詩があるのか」と批判されることがしばしばあった。「俳諧の誠」のないところに詩はない。（斎）

温故知新

12：片隅の貧しい命

●チャボリと小さい音

太宰治『津軽』昭和十九（一九四四）年
小山書房刊

（前略）池のほとりに立つてゐたら、チャボリと小さい音がした。見ると、蛙が飛び込んだのである。つまらない、あさはかな音である。とたんに私は、あの、芭蕉翁の古池の句を理解できた。私には、あの句がわからなかつた。どこがいいのか、さつぱり見当もつかなかつた。名物にはうまいものなし、と断じてゐたが、それは私の受けた教育が悪かつたせゐであつた。あの古池の句に就いて、私たちは学校で、どんな説明を与へられてゐたか。森閑たる昼なほ暗きところに蒼然たる古池があつて、そこに、どぶうんと（大川へ身投げぢやあるまいし）蛙が飛び込み、ああ、余韻嫋々、一鳥啼きて山さらに静かなりとはこのことだ、と教へられてゐたのである。なんといふ、思はせぶりたつぷりの、月並な駄句であらう。いやみつたらしくて、ぞくぞくするわい。鼻持ちならん、と永い間、私はこの句を敬遠してゐたのだが、いま、いや、さうじやないと思ひ直した。どぶうんなんて説明するから、わからなくなつてしまふのだ。余韻も何もない。ただの、チャボリだ。いはば世の中のほんの片隅の、実にまづしい音なのだ。貧弱な音なのだ。芭蕉はそれを聞き、わが身につまされるものがあつたのだ。古池や蛙飛び込む水の音。さう思つてこの句を見直すと、わるくない。いい句だ。当時の檀林派のにやけたマンネリズムを見事に蹴飛ばしてゐる。いはば破格の着想である。月も雪も花もない。風流もない。ただ、まづしいものの、まづしい命だけだ。当時の風流宗匠たちが、この句に愕然としたわけも、それでよくわかる。在来の風流の概念の破壊である。革新である。いい芸術家は、こうこなくつちや嘘だ、とひとりで興奮して、その

夜、旅の手帖にかう書いた。

「山吹や蛙飛び込む水の音。其角、ものかは。なんにも知らない。われと来て遊べや親のない雀。すこし近い。でも、あけすけでいや味。古池や、無類なり。」

温故知新解題●名作『津軽』刊行から七十年。太宰治はすでに十分「温故知新」に値する昔の人だと思うが、この連載のいつもの時間感覚からすると、ほとんど私たちの同時代人とも言えるかもしれない。実際、芭蕉の「古池や」の句がどうもぴんと来ない、よくわからないという思いは、私たちの多くも全く同じように抱いたことがあるのではないだろうか。

その、わからなさの理由をいろいろ考える。芭蕉は昔の人で、私たちは現代人だから、自然環境、社会環境、文芸史上の位置などなど、どのような角度から見ても、芭蕉と私たちは大きく隔たっている。だから考えること、感じることも随分違うはずだ。そういう前提で、どこがどう違うのか解きほぐす。そういう経路を通って「わかろう」とする。

しかし時間の隔たりというものはタイムマシンにでも乗らないかぎり、本当のところは決して克服できない性質のものだから、そういう「違い」を前提に出発しても、いつまで経っても「わかった」に辿り着くことはない。追求すればするほど、ますます「わからない」の迷路に深入りするばかりだ。筆者にも心当たりがある。そういうふうにして、これまで様々な論者が「古池」の句を様々に論じてきた。しかしそれらを読んでも、せいぜい「わかったようなわからないような」程度のことにしかならない。

太宰治には、小説に手を染める前に、俳句を作っていた時期があるという。それなら様々な俳論も、「古池論」も読んで、同じような経験をしていたに違いない。そういうことを前提にしての、太宰の「古池論」がこれだ。「論」と言えるかどうかわからないようなささやかなものだが、筆者がこれまでに読んだ「古池論」のなかで、これがいちばん腑に落ちた。

なぜこの一文が腑に落ちるのか、ということが、今号に転載した根津芦丈師の「芭蕉の心法」についての教えを読むと、よくわかる気がする。

芭蕉が古池の句を作った貞享の時代から現代まで、生物としての人間も蛙も、何も進化していない。両者の生活環境は大きく変わったと言えば言えるが、人も蛙も、与えられたささやかな命を精一杯生きているという大局では何も変わっていない。蛙が水に飛び込む音を聞いて人が何を感じ取るかということも、さして変わっていないはずだ。まず蛙の飛び込む音に耳を澄まし、またかつて聞いたその音をよく思い出し、そこから自分の内心に湧き起こるものに耳を澄ます。そういう、芭蕉と私たちに共通するものを出発点にしないかぎり、この句を「わかる」ことはできない。そこに難しいものは何もない。

そういうことを気付かせてくれたのが、太宰の「チャボリ」という絶妙な擬音語だ。日本語は擬音語、擬声語、擬態語を多用するが、日本人自身がそのことを必ずしも高く評価しない。しかしこれらの語彙を通せば、理屈を越えて対象と「一枚になる」ことができる。日本語の豊かさの大きな源泉の一つだ。

発句を考えるときにも読むときにも、「考える」前にまず「感じる」ことだ。考えてもいいが、「感じること」が「考え」に伴わないかぎり、それは決して一句にならない。付句も同じだ。前句を「考える」よりも、まずできるだけ深く前句を「感じる」こと、そこから発想してそれに付ける自句も、自身が何かを「感じる」句になっているかどうかが大切だ。作者自身が何も「感じ」ない句に、次の作者がよい句を付けてくれると期待することはできない。

「俳諧は三尺の童にさせよ」と芭蕉が言ったのもそういうことだろう。

ただし、ただ頭を空っぽにすればいいのかといえば、そういうものでもないはずだ。花の美しさを感じ取るためには、見る人自身の心に花がなければならない、という意味のことを、古今和歌集の序で紀貫之が言い、芭蕉も同じことを言った。心に花を咲かせるには、修練や経験の蓄積も必要だろう。

筆者は子供の頃、農村で暮らしたことがあるので、蛙が水に飛び込む音を数え切れないほど聞いたが、太宰がこの「チャボリ」で表現したようなことを感じたことは一度もなかった。『津軽』をずっと以前にも読んだことがあるが、太宰がそこで芭蕉に言及していることすら、記憶になかった。それ以後の、筆者自身の実生活上のさまざまな経験、そして俳句や連句の創作経験があってはじめて、この「チャボリ」に感応し、それに伴って、かつて聞いた蛙の音に別の光が当り、芭蕉の句をそれなりに「わかった」気になることができたのだ。太宰もまた、久々の故郷津軽への帰還の旅という特別な状況の中だったからこそ、またそれまでに句作や俳諧についての思索を重ねたことがあるからこそ、この音をこのように聞くことができたのではないだろうか。

華やかなものだけが「心の花」ではない。「世の中のほんの片隅の、まづしい」命に感応する力もまた、心に咲く花のひとつだ。美しいこと、楽しいことだけでなく、辛いことや情けないことも数多く経験することが心の花を養う。だから、俳諧は三尺の童の文芸や青春の文芸であるだけでなく、とりわけ老年の文芸でもあるのだろう。芭蕉が若くして「翁」と呼ばれたのも故なきことではない。（斎）

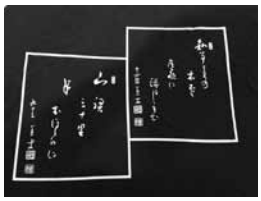
事務局だより

●第百二十八回例会（平成二十六年初懐紙）が開催されました

一月十九日（日曜日）、ホテルフロラシオン青山にて、本年の初懐紙が開催されました。十卓に分かれて歌仙を興行し、全席披講ののち、午後五時に閉会しました。当日の歌仙十巻は、今号のP2～P6に掲載されています。

また当日は、根津芦丈翁九十二歳時の自筆の飾り皿と、同じく九十三歳時の自筆色紙を染め付けた風呂敷を、根津忠史丈よりご披露いただきました。

根津芦丈翁自筆飾皿



根津芦丈翁自筆風呂敷（部分）

初懐紙実作会風景

●今後の予定

・第百二十九回例会

平成二十六年藤祭正式俳諧興行・二十韻実作会
四月二十三日（水曜日）
十二時～十七時（受付十一時より）
於　亀戸天神社

・第二十四回猫蓑同人会総会・歌仙実作会
六月十五日（日曜日）
十一時～十七時（受付十時半より）
於　新宿ワシントンホテル新館

・第百三十回例会
平成二十六年度総会・歌仙実作会
七月十六日（水曜日）
十一時～十七時（受付十時半より）
於　江東区芭蕉記念館

・第百三十一回例会
芭蕉忌正式俳諧興行・明雅忌脇起源心実作
十月十五日（水曜日）
於　江東区芭蕉記念館

●猫蓑基金にご協力ありがとうございます

・山寺たつみ様　平成二十六年三月　五千円

基金口座　みずほ銀行新宿新都心支店
猫蓑基金　普通預金　３３７６０４５

●転居

・中田あかり　東京都世田谷区へ転居

●各種募吟にふるってご応募ください

・第二十九回国民文化祭・あきた２０１４文芸祭
「連句大会」募吟

形式：半歌仙
締切：平成二十五年五月三十一日（消印有効）
応募料：一巻につき二千円

連句大会は、今年十月十一日（土曜日）から十二日（日曜日）にかけて、秋田県秋田市で吟行会、交流会、募吟受賞作品表彰式、連句実作会が行われます。大会当日にもふるってご参加下さい。なお、募吟応募は大会当日参加のための必須条件ではありません。

・第二十三回岐阜県文芸祭連句部門
六月下旬頃に募集要項発表

各詳細は猫蓑会内の各実作会などでお問い合わせ下さい。また猫蓑会オフィシャルサイトの「サイトマップ」ページに、「関連リンク」の「代表的な連句募吟」として各募吟サイトへのリンクを設置しています。応募用ファイルなどをネット上で公開し、メール添付で応募できる募吟もあります。

●猫蓑会オフィシャルサイト
http://www.neko-mino.org/index.html

季刊　『猫蓑通信』第九十五号
平成二十六年四月十五日発行
猫蓑会刊
発行人　青木秀樹
〒182・0003
東京都調布市若葉町2・21・16
編集人　鈴木了斎
印刷所　印刷クリエート株式会社